KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

Politeness理論再考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀, 素子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006348

関西外国語大学 研究論集 第75号（2002年2月）
Journal of Inquiry and Research, No.75（Feb. 2002）

Politeness 理論再考

堀　　素子

1．Brown & Levinson の Politeness 理論の前提

Brown & Levinson（以下、B&L と略す）が Politeness 理論として最初の版を1978年に発表したとき、数々の批判が出た。その主たるものは非英語圏から集団と個人の関係、役割、場の制限などが十分記述できないとするものであった。のちの1987年版で彼らはこの理論は個々の文化間の差異に対応するように作られているのではなく、多言語間の比較を可能にするための「基本的なフォーマット」として作成したのでそのような使い方をしてほしいと述べている。しかし 'coded social statuses'（記号化された社会的地位）のようなものは P, D, R のみで把握できないかもしれないと認めている(1987: 17)。本論文ではこの点について B&L の positive/negative face の普遍性について考察しようと思う。

はじめに B&L が基本にしている社会的な関係における対人間の交渉の基本について、概略述べよう。彼らの理論の柱には以下のようないくつかの前提がある(1987: 56)。

（1）社会人類学的視点から言語使用を観察し、理論として体系づける。
（2）理論の目的は以下の4つを示すことにある。
　（i）ある原則(principle)は普遍的であると同時に社会的なものである。そのため文法形成の深部に社会的なものが存在する。
　（ii）人間は相互に理解し協力するという基盤の上に、複雑で豊かな仮定や推論が成立していて、それが言語・非言語のあらゆる面に表現されている。人間にはそれを使いこなす理性が備わっていて、それがさまざまな言語的・非言語的表現を可能にしている。
　（iii）会話は対話者間の相互作用であって、その社会関係を表明すると同時にそこで交わされる言語は戦略的に構築されたものである。この戦略的なメッセージの構築(strategic message construction)が、言語と社会を結ぶ中心的座標となる(the key locus of the interface of language and culture)。

（iv）異なった言語に見られる文化的な多様性を強調するあまりに、文化的相対性(cultural relativity)を主張することには反対する。表面的な多様性はその底に横たわる普遍的原理によって、しかもそれとの関連によってのみ説明されうる。

（3）ある目的で行うときの言語的・非言語的行動には、異文化間にも共通に見られる特徴がある。このような共通項を 'polite usage' の下に存在する抽象的な原則で説明したい(We want to account for the observed cross-cultural similarities in the abstract principles which underlie polite usage.)。

（4）このような異文化間の共通項を説明するモデルは、ある特定の文化で用いられる表現に適応することができる。つまり、いかなる文化における社会関係をも厳密に叙述することができる民族誌的手段となりうる。

彼らの主張は、普遍性というのは言語の本質的な部分いわゆる competence 的な部分にのみ存在するのではなくて、社会との関連で異なった言語ごとに決定される待遇表現的な部分にもあるということである。待遇表現的な言語分析は現実に使用される言語（多くの場合会話）を対象とするが、その現れ方がそれぞれの文化・言語で異なることは普遍性を記述する際に妨げとなるものではない、むしろそれぞれの社会と言語との関連の現れ方に普遍性があると考えるのである。

つぎに彼らの理論の具体的な内容に少し入る。まず基本となる Face Threatening Acts（通常 FTA と略す)とその出発点となる Face（面子）について簡単に述べよう。

2．Model Person, Face, および Face Threatening Acts

Politeness を具体的な行動に移すモデルとして B&L は MP(Model Person)を登場させる(1987: 58-59)。この仮想のボール紙人形は、自然言語を上手に使いこなし、rationality and face（理性と面子)という 2 つの特性を備えている。理性とはある目的を達成するための手段を選択する際の詳細なモデルを所有していること、face とは社会的な自己のイメージで、理性ある社会人なら誰でも持っているものである。その 1 つは negative face で「他人に自分の領域や持ち物を侵犯されず、行動を強要されないこと」(the basic claim to territories, personal preserves, right to non-distraction – i.e. to freedom of action and freedom from imposition)で、2 つ目は positive face で「他人から認められ賞賛されること」(the positive consistent self-image or 'personality' (crucially including the desire that this self-image be appreciated and approved of) claimed by interactants)である。これらの face の根底にはそれぞれ「好ましくない相手から距離をおく」「好ましい相手に近づく」という人類共通の欲求、地球上の生物一般に通用する基本的な欲求がある。B&L の MP はこのような基本的かつ普遍的欲求を

満たそうとして行動する。動物ならば好ましい相手にはひたすら近づく、恐ろしい相手からはひたすら逃げる、という単純な行動でその欲求を表現するが人間のモデルである MP はそうではない。

B&L は、MP がある行為を行う際に動物と同様にそれを直ちに行うか、あるいはそれにある種の緩和処置を加えてから行うかの選択をすると考える。そしてその結果が言語の polite usage として現れると考える。この待遇表現の選択を決める要因は FTA (face thereatening act)と名づけられた「面子を脅かす行為」の程度による。すなわち、FTA のレベルが高ければ高い待遇表現が選択される一方、低ければ低い待遇表現が選択される。ここでいう待遇表現の高低は B&L の politeness strategies における順位を指す。これについては後述する。

さてそれでは、FTA はどのようにして計るのであろうか。これについて、B&L はつぎのような方程式を立てている(1987: 76)。

$$Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx$$

Wx は FTA すなわち話者が相手の面子を脅かす行為の重さを表す。D は「対話者間の社会的距離」、P は「対話者間の相対的な力関係」、そして R は「各文化における特定の行為の比重」を表す。D は S(話し手)と H(聞き手)との社会的な地位の差・役割の差をいう。P は H の力の方が S よりも大であればあるほど大きい値となる。すなわち H が S の行動の決定権を持つほどの権力を持っているとか、S の身体的な自由を奪うほどの腕力を持つ場合には P の値は大きくなる。R は問題の行為(act)がある特定の文化・社会でどれほどの比重を持つかを示す。ここに異文化間の差異が大きく出る可能性がある。換言すれば、同じ行為が異文化間で異なった意味・比重を持つ場合、この Rx の値の差となって現れる。

Wx の具体的な計算方法については B&L は何も示唆していないが、Brown and Gilman (1989)がこの方程式を使ってシェークスピアの四大悲劇の中の会話を分析した例がある。その結果、登場人物の間の P と Rx の変化による Wx の変化はまさにこの方程式どおりであった。しかし距離 D の変化は人物間の感情の変化があらわれたときのみで、距離が縮まる（好意が大になる）と使用言語はより丁寧になり face への配慮は高くなった。この点だけは B&L の方程式は適応しなかったという。このようにして対話者間の 3 つの変数を個別に変化させて測定してみれば、Brown and Gilman のような結果が得られるにちがいない。これまで B&L に対する多くの批判はこの方程式の使い方をまちがっているのではなかろうか。

3．FTA の分類

こうして測定される FTA は、話し手 S の face に対するものか聞き手 H の face に対するものか、またそれは negative face を脅かすのか positive face を脅かすのかによって 4 区分に分

けられ、次のように分類される（B&L 1987: 65-68）。

まずHのnegative faceを脅かすものとして次のようなものがある。

A．Hの未来の行動について言及する。そのことでHに圧力をかけることになる。

（a）命令、依頼

（b）示唆、忠告

（c）思い出させる

（d）脅迫、警告、挑戦

B．Hに対してSが将来行う好意的な行為について言及する。そのことでHにその行為を受けるか拒絶するかの選択を要求することになり、負い目を負わせる可能性も生じる。

（a）申し出

（b）約束

C．HあるいはHの持ち物などに対するある種の欲求をのべる。そのことでHはそのものをSから守るかSに与えるかなどについて考えねばならなくなる。

（a）お世辞、羨望の表明、賞賛

（b）Hに対する強い感情、たとえば憎しみ、怒り、情欲

つぎにHのpositive faceを脅かすものとして次のものをあげている。

D．Hのpositive faceのある面について否定的な意見をいう。

（a）承認しない、批判、軽蔑、からかい、不満、叱責、非難、侮辱

（b）矛盾したことをいう、賛成しない、反対意見をいう

E．Hのpositive faceに注意を払わない、あるいは無視する。

（a）（コントロールされないままの）はげしい感情をぶつける

（b）無関係な話題、タブー、その場にふさわしくない話題を出す

（c）Hに関する悪いニュース、Sに関するよいニュースを持ち出す

（d）感情的に対立する可能性のある話題、たとえば政治、人種、宗教、女性解放などの話題を出す

（e）突然非協力的な態度をしめす、たとえばHの話の最中に割り込む、話の継続を促さない、注意を払わない

（f）はじめて会った時に呼称や敬称をまちがえる

つぎにSのfaceを脅かすものとして次の項目をあげている。

F．Sのnegative faceを損なうもの

（a）感謝の意をあらわす

（b）Hの感謝あるいは謝罪をうける（それを否定・縮小しなければならない）

（c）いいわけをいう

（d）H の申し出をうける（負い目を負う、H の negative face に侵入することになる）

（e）H の無礼に反応する

（f）意に反する約束・申し出をする

G．S の positive face を直接脅かすもの

（a）謝罪をいう

（b）お世辞をうける（それを否定・縮小しなければならない、そのため自己の face を傷つける、あるいは H にお世辞を返さねばならないと感じる）

（c）身体のバランスを失う、洩らす、よろめく、ころぶ

（d）自己卑下する、足を引きずる、立ちすくむ、ばかな行動をする、自己矛盾する

（e）告白、罪あるいは責任を認める、たとえばある行為をした/しなかった、当然知っているはずのある事柄を知らなかった

（f）泣く・笑うなどの感情のコントロールができない

このように FTA には A から G まで28の acts が含まれる。すなわちこれらの行為は「理性ある」人間が politeness に基づいた行動をするときの基準となるものである。B&L は人はみな 'the mutual vulnerability of face'（相互に傷つきやすい面子）を持っているので理性ある人間ならばなるべく FTA を避けようとする、どうしても避けられないときはその度合いを弱めようとする(1987: 68)。この FTA を弱めようとする方策が politeness strategies であり、その方策としてよく知られた positive politeness/negative politeness の strategies を提案するのである。上のリストの中には重複するものもあるがそれはその FTA の扱いがきわめて複雑であることを示している。

4．上下関係の中での Face

さて上記のような FTA が提示されてその１つ１つをていねいに見てみると、日本語話者としては少し異なった見方を提示したくなる。日本社会の構造を考えてみると、もっとも典型的に極端なのは旧軍隊あるいは江戸時代の武士社会であるが、上下関係がはっきりしている場合にはたして下の者に 'vulnerable face'（傷つきやすい面子）を持つことが許されるであろうか。武士の命は主君に預けてあり、旧軍隊の兵隊の命は天皇陛下のものであり、現代でも平会社員のすべては上司の意のままである。このような上下関係の中で、下に置かれた者に face を持つことが許されるであろうか。仮に許されたとしてもそのような者の face を上の者が脅かすことがはたして FTA（面子を脅かす行動）と見なされるのであろうか。上下関係の社会では face の存在そのものへの疑問があり、同時に FTA を構成する内容についても疑問がある。B&L が前提としているのはあくまでも「相互に傷つきやすいfaceを持った人間が協力して互

いの face を守っている」(1987: 61)社会であるから。上に列挙した FTA を1つづつ検討して、上下関係のある間でどの程度適用可能か見てみよう。

まず A.「H の行動について言及する。命令、依頼、示唆、忠告、思い出させる、脅迫、警告、挑戦」については、S が H の上である場合には絶対に FTA ではない。むしろ上下関係はこのような行為を通して成り立っているので、命令や忠告なしでは仕事はできない。下の者もこのような行為を自分の面子を脅かすものとは思わず、それが仕事の一部でありちゃんとした命令が出せないようでは上司の資格がないと思っている。

ただ、これらは上下という社会的関係に支えられて FTA とは認識されないものの、実際にそれを行うときにはどのような言語を使っているだろうか？このことについては別に考える必要がある。

つぎに B.「H に対して S が将来行う好意的行為について言及する。申し出、約束」については「H に負い目を負わせる可能性」があるので H の negative face を脅かすという。しかし日本社会ではこのような行為は H に対する好意あるいは従順ではあっても H に対するマイナスの行為とはみなされない。その意味でこれは下の者が上の者に対して行う行為であり、上から下に向かっての行為ではない。したがってこれは S は下の者、H は上の者でなければならない。

C.「H あるいは H の持ち物などに対するある種の欲求をのべる。お世辞、羨望、称賛」についてはかならず下から上へである。この行為は H の positive face を持ち上げることになり、絶対に FTA ではありえない。この場合、S はかならず下の者、H は上の者である。しかし「H に対する強い感情、憎しみ、怒り、情欲」がなぜ「お世辞、羨望、称賛」といっしょにここに含めてあるのかわからない。この後者こそ H の negative face を攻撃するものであるから非常に大きな FTA であるということになる。このような感情的なものは上から下へ向かって出やすいが、場合によっては下から上に出ることもあるため、H が上か下かをきめることはできない。

D. つぎに H の positive face に対する FTA として「否定的な意見をいう。承認しない、批判、軽蔑、からかい、不満、叱責、非難、侮辱」および「矛盾したことをいう、賛成しない、反対意見をいう」があるが、これらはまさに上の者が下の者に向かって常時投げつけていることばではないか。このようなことばによってどれだけ多くの人が傷ついているかしれないが、上下関係を所与のものとして受け入れている社会ではみながつらい思いをしながらそれに耐えている。しかも下から上には絶対にいうことはできない。そのためこれはかならず S は上の者、H は下の者という場合に起こる FTA である。はたして上である S はこのような事柄を politeness strategies を使って衝撃を弱めようと思っているだろうか。その意味で内容は非常に重い FTA であるが、どの程度 politeness の対象となるのだろうか。

E.「H の positive face に注意を払わない、あるいは無視する。激しい感情をぶつける、無関係な話題、タブー、その場にふさわしくない話題を出す。感情的に対立する可能性のある話題を出す。突然非協力的な態度を示す。話に割り込む、話の継続を促さない、注意を払わない」というような感情的な動機は上下関係というよりむしろ友人関係・家族関係にありがちなことであろう。ただしそこでも優勢なのは力・役割に基づく上下関係であり、上の者は自由に感情表現をするが下の者は極力おさえるであろう。

F. こんどは S の face に対する FTA であるが、negative face を脅かすものとして「感謝の意をあらわす、H の感謝/謝罪をうける、いいわけをいう、H の申し出をうける、H の無礼に反応する、意に反する約束・申し出をする」があげられているのは、これらが negative face want（自己の領域に侵入されたくない欲求）を阻むからであろう。たしかに「感謝の意をあらわす」と「いいわけをいう」はその範疇に入るだろう。しかし上下関係が明瞭な日本社会では上位者が下位者「H の感謝/謝罪をうける」のは相手に示す「鷹揚な態度」と見なされ特に FTA ではないと思われる。「H の感謝や謝罪を否定・縮小する」ことは S 自身の FTA かもしれないが、それを敢えて行うことで逆に「謙遜な行為」として自己の positive face を高めることにならないか。「意に反する約束・申し出」は常に下から上に対して行う行為で S にとっては大きな FTA であるが、上位者がしばしば下位者に対して行う「H の申し出をうける、H の無礼に反応する」は上位者 S にとっては FTA でもなんでもあるまい。

G. 最後の S の positive face に対する FTA には「謝罪をいう、お世辞をうける、身体のバランスを失う、洩らす、よろめく、ころぶ、自己卑下、足を引きずる、立ちすくむ、自己矛盾、告白、罪・責任を認める、泣く・笑うなどの感情のコントロールができない」があるが、このうちの身体に関する部分は相手が誰であれ自己の名誉を危うくする行為なので当然 FTA である。しかし「謝罪をいう、お世辞をうける」はどうか。謝罪するのはあきらかに自己の面子を傷つけるがお世辞をうける行為もそうであろうか。B&L は、お世辞をうけるとそれを否定したり同様のお世辞を返さなければと思ったりするので自己の positive face を傷つけることになるという。すると「お世辞」というのは諸刃の刃で、H の face も S の face も傷つけることになる。しかしどの社会にもお世辞ははびこっているし、出す側も受けとる側もそれほど面子を脅かされているようには見えない。また「自己卑下」は日本社会では下位者には当然のことであり、上位者でも場合によっては「謙遜」という美徳として面子を高めることになる。もちろん世界にはこれで面子が傷つくと捉える社会もある。

以上述べたことを B&L のオリジナルと比較するために 2 つの表を作成した。表 1 は B&L のオリジナル、表 2 は上下関係を加味した言語使用による分類である。B&L の A-G の各項目を、FTA か Not FTA か、H と S それぞれの negative face/positive face のどちらに対するものかにしたがって分類した。S>H, S<H は S, H 間の上下関係を表す。

表1．H/S の Negative/Positive FTAs (based on B&L 1987: 65-68)

FTA			
H's face		S's face	
Neg.	Pos.	Neg.	Pos.
A-a-d; B-a, b; C-a, b	D-a, b; E-a-f	F-a-f	G-a-f

表2．上下関係によるFTAと Not FTAの分類

	FTA				Not FTA			
	H's face		S's face		H's face		S's face	
	Neg.	Pos.	Neg.	Pos.	Neg.	Pos.	Neg.	Pos.
S>H		D-a, b E-a-d	F-a, c**	G-a, c, d*** e, f	A-a-d C-b	E-e, f	F-b,d,e	G-b
S<H	A-a*		F-c, f	G-c, d, e, f	B-a, b C-a		F-a	G-a, d

*S<H の場合、A-a のうちの「依頼」のみが FTA である。「命令」は行われない。
**S>H の場合、F-a, c はめったに行われないが行われたときは FTA である。
***S>H の場合、G-d のうちの「自己卑下」は含まれない。

この表2で空欄になっている個所にも意味がある。すなわち、S>H の場合、S は自分の negative face を脅かすような FTA は行わない。また、S<H の場合、S は H の face(negative も positive も)を脅かすような FTA は行わない。同時に Not FTA であっても H の positive face に関する行為（たとえば下の者が上の者を「褒める」など）は行わない。これらはどのような politeness strategies を用いても表現されることはない。このような行為は上下関係の中では禁じられている。

表2の中で、FTA の範疇に入っているものには B&L の方程式がそのまま適用できよう。問題は 'Not FTA' の範疇に入っているものである。FTA でないなら B&L の strategies は適用できないだろうか。そうではない。'Not FTA' ということは FTA を緩和するための処置をとらない、換言すればそのままストレートに言う、ということである。

たとえば S>H の場合、A-a の「命令」は武士社会でも軍隊でも上位者は当然のこととして FTA などという意識無しに下位者に行う。B&L でいえば 'Bald on record'（そのままはっきりと）の strategy に入る。E-e の「突然非協力的な態度をしめす、H の話の最中に割り込む、など」も同様、上位者は当然のように行う。また、F-b, d, e「H の感謝・謝罪をうける」「H の申し出をうける」「H の無礼に反応する」は上位者として当然のことでなんら気にすることはない。つまり、P(S>H)の場合は 'Not FTA' に属する行為はすべて 'Bald on record' になる、としておけばよい。

S<H の場合は、たとえば B-a, b の「申し出、約束」、C-a の「お世辞、羨望の表明、称賛」

は、下位者から上位者への当然の行為として行う。これを行ったからといって S は自分の face が損なわれたとは思わない。むしろ相手の positive face を高める行為として捉えているはずだ。同様に、F-a「感謝の意をあらわす」や G-a, d「謝罪をいう」「自己卑下する」もなんら face を傷つけられる行為とは思わない。むしろ自分を低く置くことでかえって自分の positive face が高められると思っている。したがって S<H の場合にも 'Not FTA' の行為の strategy としては 'Bald on record' としておけばよい。

このように考えると、上下関係の厳しい社会でも S-H 間の P-value を前もって入力することによって B&L の strategies をそのまま適用できる。これまで日本語話者の立場から B&L 理論を批判してきた Matsumoto (1988)や Hill et al. (1986)および Ide (1991), Ide and Yoshida (1999)では「日本語を解釈する際には 'relation-acknowledging device' (関係認識装置) が必要」(Matsumoto)とか、「日本語には 'discernment and volition' の 2 つの mode が働いている」として日本社会のルールに対する知識を「わきまえ」ておく必要がある(Hill et al.; Ide and McGloin; Ide and Yoshida)とか、いわば日本社会と日本語の特殊性を前面に押し出した主張がされてきた。しかし「ルールのわきまえ」や「関係の認識」は話者の心理的な面を取り出して名前をつけただけで、言語学的な分析にはほど遠い。

日本人といえども人間としての基本的な欲求は持っているしそれを何らかの方法で実現したいと思っている。しかし社会がそこに住む市民に要求することはそれぞれの社会で異なる。たまたま日本社会はこれまで千年以上にわたって上下関係を何より重要視してきたので、社会全般がそれに則って運用されてきたし言語も例外ではない。したがってその社会に住む日本人が上下関係を維持する方向で行動し言語使用してきたのは当然であろう。そこでの face が人権を重んじ平等を志向する西欧社会の face と異なってもふしぎではない。B&L は face が文化によって異なる内容を持っていても、その face を守るために人は politeness strategies を考案し使用するという (上記、1 節を参照)。それを証明するために上では B&L の FTA の日本的な視点からの再分類を試みたのである。

次に、日本語の上下関係を支える特徴として敬語をしらべてみよう。

5．B＆L の敬語に対する考え方

B&Lは 'Honorifics' という節を設けて特に敬語に類する現象を持つ言語についてくわしく述べている(1987: 276-284)。また1978年版への批判に答えるかたちで 'Politeness as ritual' という節を1987年版には設けている(43-47)。本文で書ききれない場合、Notes でもたびたび言及している(Notes: 20, 28-59, 86, 99)。それらの叙述の中に彼らの honorifics に対する考え方を見てみよう。B&L は honorifics は「ある言語に特徴的な固定化した形式」と見る。そして negative politeness の Strategy 5 'Give deference' (敬意の表明) および Strategy 7 'Impersonaliza-

tion'（非人称化）の1形態として説明する。以下にそれを紹介しながら日本語の敬語についても考察しよう。

5．1．Give deference

Give deference は主として第二人称の複数化、呼称の選択、語彙の選択の中で行われる。このような語彙および文法の選択的使用は世界の多数の言語に見られる。

（i）Honorifics は deference が潜在的に持つ2つの面、「話者を下げることと相手を上げること」を制度化したものである。すなわち、社会的要因が言語形式に侵入したもっとも顕著な現象で deference の凍結した形である。

（ii）Honorifics は politeness strategies のさまざまな現象が固定化し凍結したもので、その結果、直接的・間接的に対話者間の地位の差を示すようになった。

（iii）Honorifics を規定する4つの軸を想定する。すなわち話し手―聞き手、話し手―話題の人、話し手―陪席者、話し手―場の軸である。これによって、話者と状況の関係、あるいは話者と聞き手と社会的役割との関係を表現できる。日本語の敬語に影響する複雑な要素もこれでほとんど網羅されるのではないか。

5．2．Impersonalization（非人称化）

Impersonalization は、話し手・聞き手に直接言及することなく内容を述べる方法をいう。

（i）Performatives（遂行動詞）や imperatives（命令文）を避けて非人称構文を使う。たとえば 'It is necessary that' とか 'It seems to me that' のような文型を使う。日本語にも「ねばならない」とか「のように見える」という表現がある。

（ii）言語によっては ergatives（能格動詞）によって動作から人間を消し去る。たとえばタミール語では 'I broke it' というよりも 'It broke' というのがふつうである。また謝罪をするときでも 'I tore the book' とは言わず 'The book went and tore' という。これはまさに日本語と同じで「私がこわした」とは言わずに「こわれた」といい、「私が本を破った」ではなく「本が破れた」という。

（iii）Passive voice（受動態）は一般的に動作主を消す方法であるが、中でも動作主・被動作主の双方を消し去るものがもっとも deference（敬意）の度合いが高い。たとえば 'I regret that' の代わりに 'It is regretted that'、あるいは 'If you can' の代わりに 'If it is possible' という。またいわゆる受動態に類似した表現を使うことで、たとえばツエルタル語では 'to receive + a verbal noun'「＜動作名詞＞を受けとる」という言い方で受動態を表す。日本語にも「＜検査＞を受ける」、「＜指示＞を受ける」など共通した言い方がある。

（iv）2人称代名詞の複数化は世界の多くの言語に見られる現象であるがその動機としては

２つのことが考えられる。１つは聞き手にある種の逃げ道を与えると同時に話し手にとっては相手への尊敬を示す方策となる。２つ目は親族関係に基盤をおく社会でとりわけ特徴的に見られることで、人を個人としてでなく集団の代表として複数形で扱うことで尊敬の意を表す。そのような社会では個人は単に一構成員であるだけでなく、他の集団に対しては自己の集団を代表する存在でもある。これはもしかすると複数形によって敬意を示す多くの言語のルーツであるかもしれない、と B&L は述べている。たとえばタミール語では「私の父」は *enka appaa*, 'our (exclusive) father' あるいは *namma appaa*, 'our (inclusive) father'、相手の父親は *onka appaa*, 'your (plural) father' と呼び、第三者（単数）の父親は *avaanka appaa*, 'their father' と呼ぶ。同様のことは日本語の親族名称の使用にも通じるといえないだろうか。日本語の名詞は単複同形であって親族名称が複数的内容を持つと仮定すれば、その名称で個人を呼ぶときはその集団の代表として個人を扱っていることになる。その結果尊敬の意が生じて、それ以外の名前を使うことは非礼となると考えることができる。したがって弟妹は名前で呼ぶが親や祖父母を名前で呼ぶことはできない。赤の他人に対して何の抵抗も無く親族名称が使われるのも、かってはそこに敬意が感じられたからかもしれない。

（v）１人称代名詞の複数化の例としては集団の一員としての位置付けから生じたもので、２人称の複数形と同じである。その他に business 'we'（組織の一員）としての複数形使用がある。たとえば 'We regret to inform you' とか 'We feel obliged to warn you that' などの表現がある。これらは exclusive 'we'（排他的１人称複数）であるが、タミール語には inclusive 'we'（包括的１人称複数）があって positive politeness を示すのに使われる。ところがマダガスカル語の inclusive 'we' は negative politeness を示す。日本語でも「私ども」とか少し古風な「手前ども」という言い方でへりくだりを示す。また組織の一員としては「うちの会社」とか「うちの課」とかは inclusive 'we' で positive politeness を表す。

（vi）２人称代名詞や相手の名前を使わないことで相手の face を直撃することを避ける。たとえば英語でも 'Excuse me, *you' ではなく 'Excuse me, sir' という。相手が非常に社会的高位にある場合は特に、また一般でもある程度身分差がある場合には役職名を優先的に使う。First name 使用が常識とされる米国でも、役職名あるいは Mr./Mrs. などの称号つきから first name に移るのはそれほど容易ではない（久野1977: 307-310)。タミール語では、年少者か下位者には名前で呼びかけてもよいがその他の相手には親族名称とか役職名で呼ぶ。名前で呼ぶのは大変無礼なことになる。マダガスカル語でも同様である。日本語も部長や課長、教わっている先生を役職名抜きで名前だけで呼ぶのは失礼であろう。

（vii）話し手が１人称代名詞を使わずに役職名で自分を指すことがある。たとえば 'His Majesty is not amused' とか 'But the President should not become involved in any part of

this case' など。これは話し手が、個人としての自分を役職上の行為から遠ざけた結果であろう。日本語では特に家庭内で一番幼い子供の視点から親族名称に敬称までつけて「お母さんがやってあげます」などということがある。また学校でも教師が生徒に向かって「先生のいうことを聞きなさい」などということがある。

(viii) 視点の移動による距離の開け方がある。指示語が基本的に近接を無標とし、here, this, now などの使用が positive politeness strategy であるのに反して、時制や場所を遠くに置くことによって対話者間の距離を開け negative politeness strategy とする。たとえば 'I was wondering whether you could do me a favour' とか、もっと距離を開けるためには 'I did wonder whether you might' のように過去形を使う。同様の過去形の使用はタミール語にもある。日本語でも「もしよかったら」とか「これでよろしゅうございましょうか」のような仮定法過去的表現や未来形を使うと相手との距離が開く。

(ix) 最後に、対話者間の距離を開け negative politeness のレベルをあげる手段として間接話法の使用がある。たとえば 'I'm sorry to bother you, but the Chancellor advised me to come and see you' のように第三者の発話を自己の発話の中に取り込む。このことは直接話法の場合に前提とされる positive politeness の strategy である shared point of view（視点の共有）と common ground（共通の場）を避け、自分やその関係者に関する情報を消すのである。日本語にはこのような間接話法あるいは直接的な言及を避ける言い方がたくさんある。たとえば文末に「のようだ」「らしい」「ということだ」「といわれている」などを付加する。あるいは文頭に「聞いたところでは」「人の話によると」「世間では」など。

以上、B&L の honorifics に関する叙述をまとめたが、これを見ても彼らが日本語を含む honorifics を持つ言語に相当の知識を持ちそれを自分たちの理論に組み入れていることがわかる。次に日本語以外で honorifics を持つ言語のプラグマティックな特徴を概略述べる。

6．ジャワ語

ジャワ語が複雑な honorifics を持っていることは Errington (1988)によってよく知られるようになったがその使い方についてはあまり知られていない。ここでは特に politeness の点について Smith-Hefner (1988)の論文から資料を得る。

6．1．ジャワ語の Honorifics

ジャワ語には *ngoko* と呼ばれる一番基本的でふつうレベルのものと、*kromo* と呼ばれる高位者に対して使われるものとがあり、これらを組み合わせることによってさまざまなレベルの話し方を表現することができる。この他に250－300の高低をしめす語彙があって、このうちの low honorifics (*ka*) は話者を低めるためのもので high honorifics (*ki*) は相手を高めるためのも

のである。日本語の謙譲語と尊敬語にあたるものであろう。

ジャワ語話者は上記の敬語が組み合わされた表現を polite としていて男女ともに丁寧な表現を使うことができるがその目的はまったく異なる。男性は社会での地位・権威の表明としてより洗練された言葉づかいやあらたまった言い方をする。実際にはこれらは政治的目的のために使われている。女性は他のイスラム社会に比べれば非常に解放されていて、自由に外出し仕事にもつける。しかしジャワ社会では家庭が最も重要とされているので女性は家庭内に留まって家事・育児に専念する。そして家庭内では女性は男性に対して丁寧な言葉づかいをするが、その逆はない。呼称も男女で異なる。たとえば男性から女性へは名前、ニックネーム、あるいは「妹」を意味する親族名称を使う。一方女性から男性へは「弟」「兄」「父」を意味する親族名称を使う。女性に対して「姉」「母」が無いことに注意。

家庭内での男女のことばの使用形態も大いに異なる。女性は子供が乳児期を過ぎるとすぐに父親に向かって敬語を使ってみせる。つまり母親は子供の視点から父親を見ることによって敬語用法のモデルになる。しかし父親が子供に向かって母親に敬語を使って使ってみせることはない。男性は家庭ではほとんど口を聞かない。そのことで一層権威を高めているらしい。男の子供に対しては特にきびしく、幼児期を過ぎるころには叱ることでしか話しかけない。その結果男の子はつねに家庭内で父親を恐れ、隅にいて見つからないようにする。少し成長したら家の外で大半の時間を過ごす。こうして子供は寡黙・饒舌と男女の性別とを関連させて覚えていく。

ときに母親が年長の男の子を「兄」と呼ぶことがある。これは年少の子の視点までおりて年長者の呼び方を教えているのである。もし高位の家に生まれた子供であれば、乳母などは子供に対しても敬語を使う。これは子供をそのような敬語に慣れさせるためである。学校に行けば *kromo* の敬語を教えられる。家庭でも母親などが厳しく言葉づかいを直す。もしこれが習得できなければ，その子は *tidak tahu menempatkan diri* 'not to know their proper place'（自分の分をわきまえない）といわれる。これはジャワ人にとっては非常に厳しい批判のことばである。

6．2．ジャワ語 Honorifics の歴史と現状

おそらく現在のジャワ語に見られる speech level の差は18世紀初頭に中央ジャワの宮廷で発達しその後地方に拡がったたものと思われる。中央から遠く離れた東ジャワでは宮廷の影響はあまり強くなかったので、敬語使用が見られるのはせいぜい19世紀か20世紀に入ってからである。東ジャワの山岳地帯では敬語を最初に自分の言語に取り入れるのは男性、とりわけ村長のような立場の男性である。村人の要求を退けるときに、*kromo* を巧みに使って反論できないようにしたりする。

ジャワ語の Honorifics はジャワ社会で高く評価される deference（敬意/謙遜）と、power &

refinement（権力と教養）という2つの顔を持っている。これは敬語の歴史が宮廷から始まったことに深い関係があろう。つまり権力者の方が敬語を上手に使っていたので権力と敬語がむすびつき、のちには敬語の上手な使い手が権力者になりやすい、あるいは権力者は敬語を使わねばならないとされるようになった。しかもこれは「適切な行動に関する伝統的な価値観」という装いをしているので支配者にとって敬語の達人になることは一層効果的である。

このような敬語の使い方は日本語にもある。地位の高い者ほど敬語をたくさん使って暗に威張る。また商店などでは貧乏そうな客には「慇懃無礼」な敬語で追い返す。こうして敬語は話し手の社会的優位性を見せつける道具にもなる。Politeness の持つ威圧感が言語的なていねいさと社会的慣習の中に隠れているために、反対することが困難で、社会的な統制の手段としては特に有効である。

7．チベット語

Agha (1998)はチベット語(Lhasa Tibetan)を現地の話者から直接聞き取り調査を行った。その結果、honorifics およびその背後にある概念について次のように報告している。

名詞にも動詞にも Non-honorific form と honorific (šesa 'RESPECT') form の2種類があるが、必ずしもみんながこの両方、特に honorifics を知っているわけではない。Honorifics について質問すると「知らない」とか「よく分からない」とかという答えが多く返ってくる。それらの答え方から総合的に判断すると、honorific lexemes を知っているかいないかは、話者の生まれ、階層、年齢、教育、職業などに深く関係していて、いわゆる sociolectal distribution (社会階層的分布)をしていると思われる。しかもある語の šesa を知っていることとそれを会話の中で適切に使うこととは別のことのようで、その意味でも šesa をうまく使いこなすことは話者の社会的地位を表わすといえよう。

たとえば 'Mother went to [the] house' という意味を伝えるのに5種類の文がある。丁寧さの点で両端に non-honorific sentence と "pure" honorific sentence があり、その中間にあとの3つがある。Non-honorific 文には honorific lexeme（敬意をあらわす語彙）はゼロで、中間の3文には文中に1語ある程度。もっとも丁寧な pure honorific 文では honorific が入る可能性のある場所にはすべて入っていて、ほとんど全部の語が honorific となっている。1文の中に honorific と non-honorific が混在している場合でもある程度の丁寧さはあるとされる。

この中間文のような honorific lexeme の混在を Agha は 'leakage'（honorific の浸出の意？）と呼び、他の研究者は 'ambiguities'（曖昧さ）と呼んでいるが、現地の話者は話し手による違いだという。混在文を使う者は pure honorific で話す者よりも教養の程度が低いと見なされる。すなわち、高い価値を付加された語や文型は高いスピーチレベルを獲得し、全体として pure という判定を受ける。こうして「言語」と「非言語」の境界があいまいになり、言語が社会的

アイデンティティの基準となる。そのため子供の話し方について親はつねに厳しく「あの人にそんないい方をしてはいけない」とか「そんないい方をしろと誰がいった?」などといって叱る。

Honorifics 使用の男女差は、一般に男性の方がより複雑で高いスピーチレベルを用いる。特に宗教・政治・商売など公的な場面で権威の象徴として使われる。夫婦の間では夫の方が高い呼称で呼ばれるのは女性の低い地位を意味しているが、それは必ずしも女性の地位が家庭内で低いということではない。家事・家庭経営に関しては男性よりも大きな実力を持っているし、子供にも honorifics を使うがこれは教育的な目的である。自分が丁寧な話し方をすることを「へりくだっているから」ではなく「教養があるから」と女性は考えている。つまり honorific な文を使うことに何ら劣等感は抱いていない。

8．まとめ

以上、B&L の politeness 理論を中心に、日本語が抱える問題を考察してきた。第一は B&L の FTA と politeness strategies の関係が日本語話者の politeness 行動とどのように関連するかという問題であった。これまで非西欧語話者の間から B&L に合わない点があるという指摘が数多く出された（Blum-Kulka 1990; Gu 1990; Hill et al. 1986; Ide 1991; Ide and Yoshida 1999; Mao 1994; Matsumoto 1988; Nwoye 1992）。特に日本人研究者からは、敬語は B&L の理論になじまないとして別に「わきまえ」(discernment)という用語を提案する主張もあり(Hill et al. 1986; Ide 1991; Ide and Yoshida 1999)日本語の独自性を強調する態度が目立つ。しかし敬語に類似した構造を持つ言語はたくさんあるので、普遍的理論としてはやはり基本に B&L を据えてその上で何とか日本語の politeness strategies が記述できないものかと考えてみた。

そこではじめに彼らが FTA と見なしている行為を１つ１つ検討して、日本のような上下意識が言語全般に浸透している場合の FTA について考察した。その結果、B&L の FTA の半分程度は上下関係のある間柄では FTA とは認識されず、そのまま 'Bald on record' で直接的に表現していることがわかった（表２）。つまり、上下関係が明瞭な場合には FTA を入力する前に話し手と聞き手の力関係 (P＝H, S)が入力されねばならない。そして表２で Not FTA に分類された acts は politeness strategies を適用する対象から排除され、残りの FTA に分類された acts についてのみ B&L の strategies が適用されると考えれば、B&L の理論は日本語にもうまく適応できるのではないかと思う。

また、敬語については２つの言語、ジャワ語とチベット語を少しくわしく見ることによって、これらが日本語の敬語と同様の特徴を持ち、その社会での認識にも日本語に非常に近いものがあることがわかった。この意味でも日本語を特殊扱いするのではなく、できるだけ多言語と共通の土俵で議論・検討できるようにしておくことが望ましい。敬語と politeness の関係、特に

敬語の変化については実際のデータに基づいてすでに報告したものもあり（堀他2000)、その他にも述べたいことは多々あるが紙数が尽きたのでまた改めて書くつもりである。

参考文献

Agha, Asif. 1998. "Stereotypes and Registers of Honorific Language". *Language in Society* 27: 151-193.

Brown, Roger and Albert Gilman. 1989. "Politeness Theory and Shakespeare's Four Major Tragedies." *Language in Society*. 18:159-212.

Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. 1978. "Universals in Language Usage" In Esther N. Goody (ed.) *Questions and Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.

Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

Blum-Kulka, Shoshana. 1990. "You Don't Touch Lettuce with Your Fingers: Parental Politeness in Family Discourse." *Journal of Pragmatics*. 14: 259-288.

Chen, Rong. 1993. "Responding to Compliments: A Contrastive Study of Politeness Strategies between American English and Chinese Speakers." *Journal of Pragmatics*. 20: 49-75.

Errington, J. Joseph. 1988. *Structure and Style in Javanese: A Semiotic View of Linguistic Etiquette*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Gu, Yueguo. 1990. "Politeness Phenomena in Modern Chinese." *Journal of Pragmatics*. 14: 237-257.

Hill, Beverly, Sachiko Ide, Shoko Ikuta, Akiko Kawasaki and Tsunao Ogino. 1986. "Universals of Linguistic Politeness. Quantitative Evidence from Japanese and American English." *Journal of Pragmatics*. 10: 347-371.

Hori, Motoko. 1986. "A Sociolinguistic Analysis of Japanese Honorifics." *Journal of Pragmatics*. 10: 373-386.

堀　素子　1996.「英語圏社会における Politeness 概念――日本社会との対比――」『東海女子大学紀要』15: 37-66.

堀　素子、津田早苗、村田泰美、村田和代、関山健治　2000.『現代若者ことばの潮流――距離をおかない若者たち――』大学英語教育学会中部支部待遇表現研究会

Ide, Sachiko. 1991. "How and Why Do Women Speak More Politely in Japanese" *Aspects of Japanese Women's Language*. Ed. Sachiko Ide and Naomi Hanaoka McGloin. Tokyo: Kurosio Publishers. 63-79.

Ide, Sachiko and Megumi Yoshida. 1999. "Sociolinguistics: Honorifics and Gender Differences" *The Handbook of Japanese Linguistics*. Ed. Natsuko Tsujimura. Malden, Mass.: Blackwell Publishers. 444-480.

久野　暲　1977.「英語圏における敬語」大野晋、柴田武編『岩波講座日本語 4 敬語』東京：岩波書店. 301-331.

Mao, LuMing Robert. 1994. "Beyond Politeness Theory: 'Face' Revisited and Renewed." *Journal of Pragmatics*. 21: 451-486.

Matsumoto, Yoshiko. 1988. "Reexamination of the Universality of Face." *Journal of Pragmatics*. 12: 403-426.

Nwoye, Onuigbo G. 1992. "Linguistic Politeness and Socio-cultural Variations of the Notion of Face." *Journal of Pragmatics*. 18: 309-328.

Smith-Hefner, Nancy J. 1988. "Women and Politeness: The Javanese Example." *Language in Society*. 17: 535-554.